近代経済学を学ぶ

伊達邦春・大石泰彦 編

有斐閣選書

近代経済学に特徴的な概念や分析方法からはじめて理論内容のひろがりまで、基礎的知識が自然に身につけられるように〝わかりやすさ〟に主眼をおいて解説しました。学習上のポイントをふまえて構成された必読の入門書です。

近代経済学を学ぶ

伊達邦春・大石泰彦編

有斐閣選書

近代経済学を学ぶ　＜有斐閣選書＞

昭和47年8月30日　初版第1刷発行
昭和55年6月30日　初版第14刷発行　¥ 1400

編　者　伊達邦春（だて くにはる）
　　大石泰彦（おおいし やすひこ）
発行者　江草忠允（えぐさ ただあつ）
発行所　株式会社 有斐閣
東京都千代田区神田神保町2-17
電話 東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕振替口座東京6－370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷　藤本綜合印刷　製本　稲村製本
© 1972, 伊達邦春・大石泰彦.
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1333-080365-8611

はしがき

辞典類から学びとる知識では何か物足りない、もう少しそれに読物的興味が加味されているような書物から、近代経済学の全貌を学びとりたいと思っているひと達、しかし反面、その読物があまりにも専門的な高いレベルで書かれているのでは、なかなかついていくことが難かしいと思っているひと達の欲求を満足させることができるような形で、つまり、両者のいってみれば中間をいくような叙述のスタイルで、近代経済学の全貌を読者に伝達しようとしたのが、本書『近代経済学を学ぶ』の基本的な狙いである。近代経済学の基礎的知識として、どうしても習得しておく必要があると思われるものを、七七の項目に分類して、それぞれの項目について、前述した読物的興味を加味させながら、できる限り平明に解説し、それにつれて、近代経済学の基本的輪郭が自然に読者の脳裡に焼きつけられていくように志向したのが、本書全体の叙述上の構成である。

近代経済学には、多数の特徴的な概念が登場してくる。とりわけ重要と思われる基本的な概念に限ってみても決して少ないとは言えない。また、様々な分析方法が使われている。近代経済学を学んだものなら誰しも似たような経験を一度や二度はもったことと思うが、それは、これらの概念や分析方法に習熟し、これらを、本当に自分のものとして理解しきることが口で言うほど簡単なことではなかったということである。一応理解した積りでい

ても、案外、問題が複雑になってくると、問題自体の難かしさももちろんあったであろうが、それ以上に、問題の解明に適用されているこれらの概念や、分析方法の理解に未熟な点のあったことを、あらためて反省させられたものである。そして、こうした未熟な理解のままに、近代経済学の勉強を進めていくことによって、近代経済学の内容そのものを必要以上に難解なものにし、ひいては、これが近代経済学に対する興味を失わせることにもなりかねなかったのである。こうした経験に照らして、本書が目指したもう一つの狙いは、本論に入るに先立って、何よりもまず、とくに重要と思われる基本的諸概念について、また、対をなして使われるところに重要な特色をもっているいくつかの基本的分析方法について、できる限り平易に解説し、読者をして、本論の具体的内容についての論議を一段と理解し易いものにしようと心掛けた点である。ただその際、細心の注意をはらったのは、こうした、概念や分析方法についての説明は、その性質上、ともすれば抽象的になりがちであり、もしそうであるとすれば、心掛けそれ自体はよしとしても、結果は却って逆効果にもなりかねないという点についての配慮であった。この点、その説明を、できる限り、適当と思われる事例または問題に即して進め、抽象的にならないよう努めた積りである。ただ、このように努めたことが、反面、とりあげられた事例や問題に、全体的に見た場合、多少の重複が見られなくもなかったけれども、これも、同じ問題でも、概念の説明として取り扱われた場合、あるいは、分析方法の説明として取り出された場合、あるいはまた、主題として綿密に分析された場合とでは、その処理の仕方に多少の相違が見られるとして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も、問題の本質的理解に毫も支障を来たすものでもなく、却って問題をこのように多角的に捉えることが、その理解を案外助長させることにもなると考えられたので、敢えて多少の重複を辞さなかったわけである。

本論の方法論的構成は、必ずしも問題がないわけではないけれども、近代経済学の今日の慣行に従って、ミクロ経済学とマクロ経済学の区分に立脚してなされている。これに代わるべきより満足できる区分が登場してこない限り、この区分は全体の叙述を方法論的に構成する上で便宜かつ有用な区分であるといってよい。問題の多様化・複雑化につれて、単に微視経済的に分析するだけでは、あるいは純然たるマクロ・レベルで分析するだけでは、問題の十分な解明に達することはできなくなっているという認識は、近代経済学の現状に精通しているものにとっては、もはや常識とさえいってよいかも知れない。所得分配の問題、企業者行動の問題、経済成長の問題、等々みなしかりである。しかし、理論的分析には順序があり、その順序を踏み誤らないことも大切である。現状の進んだ分析レベルに早く到達しようとあまりに性急になることは、理論的分析の本質を見誤ることにもなりかねない。その意味で、重ねて、本論の方法論的構成は、慣行的なミクロ・マクロの区分に従った。

どんな理論でも、その背後に立ち入っていけば、長い理論的分析の歴史が横たわっているとはよく言われることであるが、たしかにその通りである。今日、われわれが近代経済学の諸理論として習得している理論のすべてのものについて、このことは言えることであ

る。したがって、われわれが近代経済学を、現時点において学習していく場合にも、既にまる百年を経過して来ている近代経済学の展開の歴史について、必要最小限度の知識をもっておくことは、理論的分析をいっそう内容のあるものとして理解するためにも是非とも必要である。本書はこの点にも相応の配慮をはらった積りである。

以上、述べてきたような二、三の意図をもって本書は上梓されたわけであるが、はたしてこれらの意図が首尾よく達成されたか否かは読者の判断にまつしかない。

最後に、本書の企画開始から完成に至るまで、終始、多大の労をはらって下さった有斐閣の石塚 務氏に対し、この機会に厚く感謝の意を表する次第である。

昭和四七年七月

編　者

近代経済学を学ぶ・目　次

1部・近代経済学の基礎

Ⅰ　経済学への出発――1

1　ホモ・エコノミクス　経済学に登場する人間像　3

2　財　人はパンのみにて生きるものにあらずとはいうが……　6

3　稀少性　ダイヤモンドはなぜあんなに高価なのか　8

4　経済主体　なによりも目指すのは純粋経済学の本質を究明すること　10

5　経済体制　政府が経済に介入しない体制なんて遠い昔の物語りか　13

❀参考文献――15

Ⅱ　分析の方法――17

6　理論と現実　理論を作ることも大事だが、使うこともまた大事　19

7　与件と変数　経済分析はそこまで分析する必要はない　21
8　一般均衡分析と部分均衡分析　他の事情にして一定という考え方　23
9　価格分析と所得分析　理論の内容から区別すると　27
10　マクロ分析とミクロ分析　方法論的に区別すると　30
11　平均分析と限界分析　総計概念と、平均概念と限界概念と　34
12　フロー分析とストック分析　年次当り一億円と一億円それ自体とは別々の量として取り扱われる　36
13　貨幣表示による分析と実物表示による分析　価格水準をどう処理するか　39
14　経済静学と経済動学　まずはじめには、時間の経過を考慮に入れないで　43
15　静態と動態　動いている経済の状態にもいろいろと……　48
16　経済解剖学と経済生理学　治療のための処方箋を作成するには、まず病源を見極めること　51
❀参考文献――53

Ⅲ　基本概念――55

17　均　衡　均衡をぬきにして近代経済学の分析はありえない　57
18　市　場　売手と買手とのさまざまの形態での〈であい〉　61

19 競　争　売手同士（買手同士）のあいだの対抗関係の如何で結果は大いに違ってくる　65
20 限　界　一単位の追加でどのような変化が生ずるか　73
21 効　用　家計の選択行為をコントロールする指標　77
22 選　択　経済行為とは選択行為にほかならない　83
23 機会費用　費用とは何かを根本的に考察すれば　84
24 弾力性　経済分析に大いに役立つ無名数——変化率と変化率の比　87
25 安定・不安定　均衡にもいろいろある——復元力の有無　93
参考文献——99

2部・近代経済学の理論

I　経済循環のしくみ——101
26 閉じた体系と開いた体系　生産と消費のからくりは　103
27 フローとストック　損益計算書と貸借対照表とがちがうように　106
28 迂回生産　急がばまわれ　109

29 単純再生産と拡大再生産　経済循環の規模は必ずしも同じでない　111
参考文献　113
Ⅱ ミクロの理論　115
30 そのあらまし　116
参考文献　119
A 需要と供給　120
31 市場と価格　財は価格を見て動く　120
32 需要曲線と供給曲線　均衡価格はふたりの子　126
参考文献　132
B 家計の行動　133
33 無差別曲線　いろいろな財についての嗜好をグラフで示せば　133
34 上級財と下級財　所得の変化による需要量への影響　140
35 補完財と代替財　価格の変化による需要量への影響　145
36 家計の均衡　家計の収入と支出のバランス　151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

参考文献——156

C　企業の行動——157

37　企業行動の条件　企業の行動は生産の技術的条件と経済的条件に従って分析される　157

38　費用の概念と費用曲線　生産の経済的条件を反映する費用の動態をえがいてみよう　160

39　生産量と生産要素需要の決定　利潤極大の追求は自由競争における企業の行動原則　165

40　収穫の逓減と逓増　収穫逓減の克服と収穫逓増は人間の経済的努力の果実といえる　170

41　競争と市場の形態　自由競争と寡占競争を分けて競争市場の形態をとらえるならば　173

42　企業と産業の均衡　自由競争における〈均衡〉の意味と寡占企業の行動を考えてみよう　178

参考文献——183

D　需要と供給の均衡——184

43　くもの巣の理論　生産には時間がかかるので　184

44　消費者余剰と生産者余剰　差額地代の考えを延長すれば　188

参考文献——192

E 産業組織 193

45 市場の構造　産業組織論のエッセンス 193

46 寡占市場と価格決定　管理価格論の問題点は何か 198

47 産業組織の再編成　警戒を要する協調的寡占への傾向 204

参考文献 208

F 市場機構と経済厚生 209

48 消費者主権　一人の消費者の満足増大は消費者全体の満足増大になるとはかぎらない 209

49 外部経済・不経済　〈見えざる手〉はどこまで働くか 214

50 公共財　国や地方自治体はどのようなサービスをどのように供給すべきか 219

参考文献 223

Ⅲ マクロの理論 225

51 そのあらまし 226

参考文献 230

A 国民所得 231

52 国民所得の諸概念　経済循環の姿を把握するための尺度　231
53 国民所得の三面等価　国民所得には三つの顔があって……　236
54 中間生産物と最終生産物　原料や燃料なしには財は生産できない　239
参考文献　243

B 国民所得の決定　244

55 総需要と総供給　経済はすべて需要と供給の関係に帰着する　244
56 有効需要の原理　なかなか計画通りに運ばないのが経済の現実、だから、事前・事後の概念的区別が意味をもつ　247
57 短期と長期　経済学でいう短期・長期とは、単に暦の日数の長短ではない　252
58 貯蓄・投資による所得決定論　まず国民所得の均衡水準を求めて、すべてはそれから……　256
参考文献　261

C 消費と投資　262

59 消費関数　国民は全体としてその所得をどのような形で支出するか　262
60 投資関数　企業は全体として設備投資をどのようにして決定するか　267
参考文献　272

D　貨幣・金融と財政 ―― 273

61　貨幣とその機能　絶対的に貨幣であるという存在はない　273

62　貨幣の価値と物価水準　物の価値はすべて相対的である　276

63　貨幣に対する需要　貨幣保有の動機と流動性選好説　282

64　貨幣の供給　信用創造のメカニズム　285

65　財政政策と金融政策　税によるべきか、公債によるべきか。インフレは起こらないか　289

参考文献 ―― 293

E　経済変動 ―― 294

66　景気循環過程　晴の後には雨天が、雨の後には晴天がある　294

67　景気循環論　単一原因の主張からモデル分析へ　297

68　経済成長の要因　人間は今日の水準には満足しない　302

69　経済成長の理論　ケインズ理論の長期化と生産要素の代替　305

70　景気政策　失業をなくし、生産要素の無駄を減らすために　310

参考文献 ―― 315

F　インフレーション——317

71　インフレーションとは何か　こう値上げばかり続いてはかなわない　317

72　価格変動とインフレーションの理論　物価上昇はなぜ起きるか　320

73　物価の安定と国際貿易　一国の物価は他の国の物価とどのようなかかわりをもっているか　325

74　物価の安定と経済成長　経済が成長すると物価は上がるのか　330

❀参考文献——335

G　国際経済——336

75　国際分業の原理　高く売れるものを生産し、安く買えるものは輸入する　336

76　自由貿易論と保護貿易論　自由競争は大切な方法だが究極目的ではない　341

77　国際経済と経済成長　経済交流はお互いの国民経済の動きを連結する　346

❀参考文献——351

3部・近代経済学の歴史

1　はじめに——355

2　近代経済学前史——356
3　限界革命——360
4　一九三〇年代——365
5　ケインズ革命——367
6　むすびに代えて——370
☆参考文献——372
★参考記事——★
☆近代経済学と数学——54
☆経済学と微分積分学——100
☆線型経済学(1)——114
☆線型経済学(2)——224
☆経済学と統計学・計量経済学——352
索引——巻末

イラストレーション・森吉正照

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com